

言語・文化の交流の場「あおぞら教室」

わたしが授業の見学に訪れた日には三つのクラスが開かれていた。

ひらがなをカードでパズルにして日本語の単語を作り上げる初級クラス。中国から来日した人たちが、手にした文字から始まる日本語の単語を見つけようと必死だ。今日はトウさんがとても喜んでいて楽しそうだ。トウさんは中国から六年前に来日、中華料理屋で働いている。

他のクラスでは、イギリス人のアダムさんが流暢な日本語で悩みを訴える。「『あなた』のことを『自分』というなんて、ぼくにはとても難しいです」。なるほど、こちらのクラスでは地域方言と標準語の違いを勉強しているのである。手作り教材のプリントには「あかん——ダメ」「ええ——いい」「ほかす——すてる」といった同じ意味の単語が、関西弁と標準語でリストアップされていた。

アダムさんはイギリスの大学で日本語を専攻し去年の九月に交換留学で来日した。今は大学の授業を受ける一方で、このあおぞら教室にも通う。ホストファミリーが使う関西弁を理解するためだ。

もうひとつのクラスのテーマは日本の迷信について。日本では霊柩車を見た指をかくす、寝る際に北に向けて枕をおかない、といった外国人にとっては物珍しく、驚きのテーマは尽きることがない。内容もそうだが、その根拠のほうに気になる学習者たちの質問が絶えない。考えてみれば、自分の国にもよくある話である。イギリスでは新しい靴をテーブルのうえにおいてはいけないらしい。台湾では傘を室内で差すのは縁起悪いことだ

たちの机を数名の学生たちが囲むように座り、日本語学習を支援する方法をとっているのである。二〇人あまりのボランティア支援者があり、マンツーマン以上のきめ細かい日本語支援が可能になる。学習者にとって、得難いものであるにちがいない。

教えながら学ぶ

しかし、この教室でもっとも印象深いのは、支援する学生たちの気負わない態度である。授業では教師と生徒のあいだでの教える・教わる関係というより、ともに学ぶという姿勢がとてさわやかであった。中島教授は「あおぞら」に参加した学生の様子について、外国人の日本語学習を支援し、日本の文化を伝えるという活動をおして、自身も異文化について学び、異文化に対する興味をふくらませて、さらに異文化との触れあいがある文化を見直すきっかけになっていっていると説明する。また、こういった自主的な活動によって、学習者たちの希望やニーズに応える教授法が工夫できること、つまり教えられた日本語教授法ではなく、自分自身にとって理想的な日本語教授法を頭に描ける教師に育っていくことにこの「あおぞら」の経験が生かされているという。

学生たちは他にもたくさん学んでいるようである。「あおぞら」の学習者は、一般的な日本語教室とは違って留学生から地域の住民まで多様な背景をもつ。またアジア圏から西欧圏まで国籍もさまざまである。日本語能力が十分で生活環境に恵まれた人もいれば読み書きができず日本社会のシステムから疎外されている人もいよう。「あお

多文化を
ささえる
人びと

日本語を伝え多文化を教わる ——甲南大学日本語教室「あおぞら」

毎週火曜日と木曜日、甲南大学文学部の講義がおわるころ、外国人が一人、二人と教室に集まり始める。

地域に生活する外国人が日本語を学びに来るのだ。

日本語教室の名前は「あおぞら」。甲南大学の学生が主体になって開いている。

キム ミソン
金 美善

民博 外来研究員

そうだ。クラスはあつという間に多文化交流の場になっていった。

手作り日本語教室

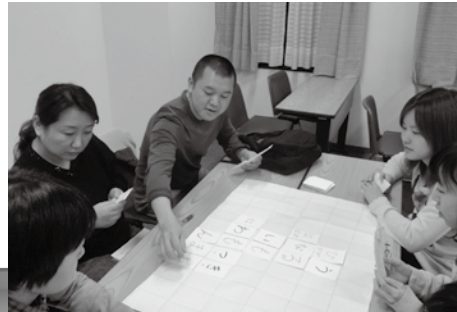
「あおぞら」は地域に生活する外国人の日本語学習を支援するために作られた日本語教室である。甲南大学文学部日本語日本文学科の中島教授の指導のもと、二〇〇四年から活動を開始し今年で七年目を迎えた。教えるのはほとんどが日本語教員養成課程の学生たち。なかには韓国や中国からの留学生もメンバーとして活動に参加している。一回の授業は九〇分、六時から七時半まで大学の講義が終わってからの活動である。春と秋、一年を二期にわけ、週に二回開かれている教室はすべて学生たちのボランティアにより運営され、授業料は無料である。二〇〇六年に発足した大学のコミュニティ・デザイン・センター(CDC)を通じて経費の支援を受けている。

授業の内容は日本語日本文学科共同研究室の日本語教育に関する書籍を参考に学生たちがグループで話し合っって検討する。もちろん先輩たちの経験も重要である。また、前もって学習者に学びたい内容を聞き、それにあつた授業計画を立てるときもある。教材は、学習者のニーズや学力に合わせて毎回別ものが用意され、定型テキストは用いない。学習者それぞれの言語環境や日本語能力の格差に配慮したためである。

クラスは初級と中級に大別するが、学習者の能力や参加状況によってはさらに小さい単位にわけ、能力ごとにグループを設けることもある。学習者「あおぞら」にはこういつた日本に生活する多様な外国人像そのものが凝縮されているように思えた。学生たちが日本語の支援を通して学ぶのはことばの違いや文化の違いだけではなく、これら日本社会の一面から広がる柔軟で広い世界観でもあろう。

「多文化共生」は今やすっかり流行のことばになっている。マスコミも書物もこのスローガンで日本の多文化社会への変化に対応しようとしている。しかし、かつての「人権教育」が「多文化共生」に名称を変えただけで、外国人を「同情的対象」に画一化しているような不自然さがぬぐいきれないのも事実である。「あおぞら」の活動にその不自然さがあまり感じられないのは、外国人を画一化することなく、互いに学びあおうとする学生たちの考え方のあらわれだと思つた。まさに「多文化共生」をスローガンなしで実践しているのである。

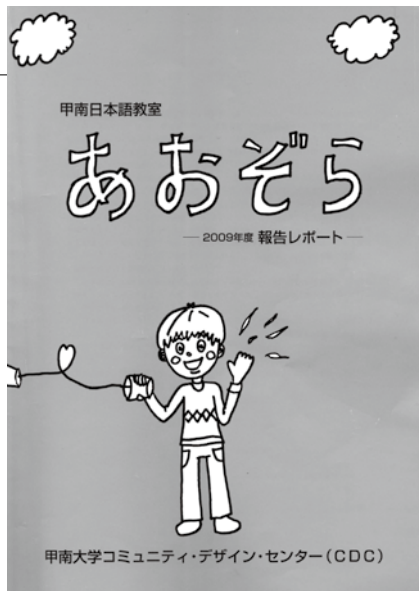
中島先生の研究室に集まり授業の準備をしている学生たち



初級クラスの授業風景



中級クラスの授業風景



年に一度活動報告書『あおぞら』を出している